

日本におけるアンチ・ドーピングの現状とアスリートの意識
—インタビュー調査を通じて—

スポーツ文化研究領域
5019A025-9 齋藤 里香

研究指導教員：中澤篤史 准教授

【序章】

近年、組織的なドーピング違反や、著名なアスリートによるドーピング違反が明らかになるなど、スポーツ界にとどまらず、社会にも大きな衝撃を与えるドーピング違反事例が発生している。現在、WORLD ANTI-DOPING CODE（以下、「Code」と略す）の施行及び改訂を中心にアンチ・ドーピング活動が推進されている。しかしながら、日本においても少ないながらもドーピング違反が発生している。日本は意図しないドーピング違反が多いとされてきたが、他者による禁止物質の混入など、これまでにないドーピング違反も発生している。

これまで哲学分野を中心にドーピングの禁止理由の検討が行われてきたが、妥当性に欠けているのが現状であると言える。それにも関わらず、アンチ・ドーピングがルールとして規定され、多くのアスリートがドーピングに向かわず競技を行っている。スポーツにおいて重要な主役の一人であり、アンチ・ドーピング活動における当事者であるアスリートは、ドーピングの問題をどのように捉えて活動しているのだろうか。

本研究では、アスリートのアンチ・ドーピングに対する意識を明らかにする。

【第1章】

第1章では、アンチ・ドーピング体制、定義及び禁止物質、ドーピング検査を中心

にアンチ・ドーピング活動の変遷を概観した。当初はドーピングに悪い意味は付与されておらず、規制のない時期があったが、ドーピングによる死亡事故をきっかけに、次第に規制への動きが出現し、ドーピング検査が導入された。技術の発展に伴い、禁止物質・方法は改訂を繰り返している。また新たなドーピング検査方法の導入など、アンチ・ドーピングの動きは加速している。

日本においても1980年代後半以降にアンチ・ドーピング活動が活発になり、1990年代後半からは急速に展開されるようになった。近年ではドーピング検査数も徐々に増加し、またアスリートのみならず幅広い人に対するアンチ・ドーピング教育が展開されるなど、より活発なアンチ・ドーピング活動が展開されている。

【第2章】

第2章では、日本におけるドーピング違反事例及びドーピング違反が疑われた事例として、新聞報道等で情報公開されている事例を確認した。また、日本アンチ・ドーピング規律パネル決定文を用いて、Code 2015下で発生したドーピング違反の種別及び、禁止物質使用の意図に関して、競技別に検討を行った。その結果、複数回のドーピング違反及び、意図的なドーピング違反が発生しているのは、世界において陽性件数の多い競技であることが確認できた。

Code 導入以前は、禁止物質の体内への侵入経路が論点となっており、ドーピング違反が撤回された事例なども確認できた。しかし、Code 導入後は、体内に禁止物質が存在しているという事実が重視され、資格停止の短縮など制裁が軽減されることはあっても、ドーピング違反が撤回されることはなかった。禁止物質が体内に存在することが競技力向上に有利に働くと考えられていることの表れと言えるだろう。一方で、意図的なドーピング違反か否かも制裁決定の重要な論点になっていることが確認できた。

【第3章】

第3章では、日本代表経験を有するアスリートを対象に、半構造化インタビュー調査を実施した。

前章までに確認できたアンチ・ドーピングの現状を踏まえて、まず、①ルールによって規制された行為、②身体への影響、③ドーピング違反の分類、④禁止物質の体内侵入経路の4点から、アスリートのドーピングの捉え方を分析した。次に、アスリートがドーピングに向かわない要因に関して、①ルールとしての規制、②ルール以外の規制、③目的達成の重視、④ドーピングの「効果」の4点に分類し、分析した。

競技種目に関係なく、多くのアスリートが、ドーピングをルールによって規制された行為と捉えており、また、ルールとして規定されていることがアスリートをドーピングに向かわせない要因になっていることについて確認できた。そしてルール以外の規制もドーピングに向かわない要因となっていることが明らかになった。また、多くのアスリートが目的達成のため

の過程を重視し、それがドーピングに向かわない要因となっていることも確認できた。意図によるドーピングの分類に関して、意図しないドーピング違反の一種である不可抗力によるドーピング違反を、アスリートの責任という観点から意図しないドーピングとは異なるものとして認識しているアスリートの存在が明らかになった。また、意図による分類に加えて競技種目の置かれた状況によってドーピング違反者の許容が異なることが確認できた。

全てのアスリートが身体に何らかの影響を与えるものと捉えている一方で、ドーピング違反者の少ない競技種目のアスリートにおいては、身体への影響を限定的に捉えており、自身の競技のパフォーマンスアップには寄与しないと考え、それ故にドーピングに向かわない要因として考えられていることが明らかになった。

【結章】

ルールによる規制、そしてルール以外の規制は多くのアスリートに共通しているドーピングに向かわない要因であった。一方で、ドーピング違反に対する許容や意図を基準にした分類、そしてドーピングの「効果」に関しては、競技種目に関連してアスリートによって捉え方が異なっていると考えられる。競技種目のアンチ・ドーピングを巡る環境に加えて、競技種目によって必要とされる能力が異なるにも関わらず、統一されたルールにて規制をしているという構造によってこのような認識の差が生じていると推測される。競技種目の置かれた状況を考慮したアンチ・ドーピング活動が求められるだろう。